

第2回学校評議員会記録

1、日時 令和8年2月17日(火)9:00~11:30

2、会場 静岡大学教育学部附属特別支援学校 視聴覚室

3、参加者

(1)学校評議員

元静岡市立週学校長

静岡ダウン症児の将来を考える会 会長

静岡の未来を切り拓く会 会長

元静岡大学教職大学院教授

静岡ロータリークラブ 会長

就労継続支援B型Canvas 営業部長

(2)本校職員

校長、教頭、事務係長、部主事(小・中・高)、教務主任、進路指導主事、教育実習担当

4、日程

(1)校内参観

(2)学校概要説明

(3)協議

5、協議内容

協議1 授業参観を通して学校評価書の意見をいただく

協議2 各学部の取組(今年度取り組んだ内容紹介や学部評価等)を紹介・説明して意見をいただく

【グループ1】小学部 ○評議員さんからの意見

1 評議委員からの質問

・学校評価8「学校は近隣施設や～」の文面を昨年度の居住地校という言葉がなくなっているが、交流は行われていないのか？

(回答)

居住地校交流は、小学部、中学部で希望する人は実施している。年間1回。

(問)

年間1回にしている理由はあるのか？

(回答)

居住地が広域のため、教員が同行しにくい。中学生は、通常学級の勉強が難しく、交流がしにくくなっている。

【評議委員より】

居住地校交流を通して、地域に自分たちがいることを知ってもらうよい機会になっている。年1回で効果があるのかどうかは疑問だが、日常的に社会とつながりをもっていることは、将来社会参加をするときにとっても大切なことである。卒業後の生活の方が長い。地域に溶け込んで生活していかないと、中高年以降になってから、地域に溶け込もうとしても難しい。今のうちから、関わりを持ち続けてほしい。

静小の子たちは、自分で考えられる、主体性のある子どもたちである。交流の内容をさらに良くして、面白い交流にしていくことで、県内や全国へ今こそ、共に生きていくことを考えた交流を実施していくことが良いのではないか。

2 学校評価書から

(1) 子どもが自ら育む健康で安心な生活づくりを育む

教師も児童生徒も知らない抜き打ちの避難訓練が今後も継続してほしい。上手に行う防災訓練ではなく、課題を見つける防災訓練である。失敗しても、慌てても良い。その中から、実際に起きたときの防災の力につながっていく。リアルな場面を想定した避難訓練の実施が大切。

(2) 子ども・教職員が「行きたい」保護者が「行かせたい」地域の方が「あって良かった」の想いに挑戦する学校づくりを進める

学校に行きたいという気持ちのモチベーションは、「楽しい」と思えることが最大のモチベーションである。学校の教育活動で言えば、特活、行事、休み時間、給食である。一部の子が教科の授業。しかし、コロナにより、子どもたちの楽しい活動時間が削られ、コロナ化が終わっても、引き続き、削られた教育活動のままである。総合的な学習の時間もカリキュラム化され、自由な学習とはいいがたい状況。教科学習は、ICT の力を借りて、個別最適な学習を保障し、共同的な学びを学校教育の中では深めていく必要がある。共同的な学びこそが面白さ、楽しさにつながり、教員のやりがいにもつながっている。

(3) 教育実習

静岡大学の教育学部の学生が、教師の職に就く時代ではなくなってきている。もちろん、実習には価値があるが、その実習から教師になる道になるとは限らないが、教育実習を人間として豊かになることにつながると考えて実習をするのも良いのではないか。

【グループ2】 中学部 ○評議員さんからの意見

【質疑応答】

○情報モラル以外に、アンケート回答の偏り(学部)はあったのか？

→大きく差異はない。

○オーストラリアでは16歳以下のSNS禁止になった。そういうことは気にしているのか？

→個人のスマホについては、基本的に校内使用は禁止なので、使うのは主に家庭。

iPadは学習で使っていて、便利さや面白さは子どもたちも理解して使用している。危険性までは小中学部での理解は難しさがあるが、伝えていく必要がある。高等部では、情報モラルの学習の中で、使用時間や空いての気持ちを考えた使い方等を指導している。

○スマホの使い方など、教えなくても子どもたちの方が自分で使えてしまう。被害もそうだが、加害にもならないようにしたい。

○就労について、福祉就労を経て一般就労に行く子は多くいるのか？

→ケースとしては少ない。

子どもの能力と企業側のニーズ、職種がマッチするか。また、採用の有無(前年度採用したから今年度はなし等)も関係する。お子さんのことをどう理解してもらえるかも大切。

・A型事業所が減っていて、就労に結びつきにくいということもある。

○どのくらいの年月、卒業生を追えるのか？

→学校としては、卒業後3年間はアフターケアとして支援している。

また、就労・生活支援(なかぼつ)につないで、継続的にケアしていけるようにしている。

学校卒業後の生活の方が長いので、卒業後を考えていくことが大切になる。

○現在の就労先の見つけ方は？(我が子の頃と違うのか？)

→現場実習が高1で集団実習、後期は個別の実習。高2・3年で個別に年間2回行っている。主に進路指導担当が相手先を見つけてくるが、子どもの思いや希望を聞き取りつつ…。

【中学部の取組について紹介】

サポートブックや価値観リストについて、実際に作っているものを見せながら説明。

実態に合わせて、価値観リストを使いながら子どもたちの思いや行動を価値付けしている。

見える化することで、自分が頑張ったことや成長したことを実感し、自信につなげたい。

学校生活やそれ以外でくじけそうになったときに、思い出してまた頑張る力になるはず。

「あこがれの姿」を單元ごとに設定し、頑張ったことを振り返り、どんな力が付いたかを価値付けている。

○言葉が得意な子は使えそうだが、苦手な子にとっては価値観リストの言葉が難しそう。細かな言葉をもう少し子どもに分かるようにしていけるとよさそう。

○研究の報告にもあったが、見える化によって、子ども自身が振り返り、成長を実感できるのはいいこと。サポートブックに蓄積しているものと、掲示(いつも使っているワークシート)が同じなのは子どもにも分かりやすい。

○單元によって用紙の色を変えるなどすると、より振り返りやすいかもしれない。

例) 運動会はピンクの用紙、未来まつりは水色の用紙 または、インデックスをつける等

→見える化と蓄積は今年度から始めたので、これからブラッシュアップしてより良いものにしていきたい。

サポートブックを見ればその子のことが分かる。それを保護者も知っていることが大切。主に面談の中で扱っているが、持ち帰って親子で話してもらう等の取組もいいかもしれない。

○親から離れたときに、その子がどういう子か、どんな生活をしている(していた)かを引き継ぐのも大切。卒業後は親が引き継いで一緒に作っていくものになればよい。

→「時代・役割等によって変わっていく自分」に気付くためのツールにもなれば。

→放任竹林の学習について紹介

【グループ3】 高等部

【テーマ1】 今回の学校評議員会前半の振り返りから

・保護者アンケート C,D評価をどう捉えるかが大切

減っているということは評価されているということ

・特に項目2の評価が改善されたのはなぜか？

取り組みの具体を中間報告というかたちで提示したことが有効だったのではないか

⇒学校の取り組みを分かるように伝えていくことが有効(=見える化)

(学年だより、学部だより、参観の機会 等)

【テーマ2】 子どもが学びのつながりを実感できる教育活動について

○実感するために

・見える化が有効

・一つの行事に対して事前から事後までを見通したアプローチが必要(評価するための手掛かりを残

す／深い振り返りにつなぐ 等)

- ・直感、感覚をフル稼働する／リアルさを求める／本物に触れる
- ・キーワードは「かみしめる」

本当に重要な情報が流れてしまわないように見える化を(デジタルの弊害)

出来事の紆余曲折、背景等を含めた理解が必要

企業の例として… お客様の評価、クレームなど事務的にリスト化されたものは、その大きさが伝わりにくい

- ・言葉のみ<視覚化<実体験(実際に触れるなど)
 - ← 高等部の美術合同作品の良さを知らするために評議員の方が実感したことから
- ・表出の仕方は様々 見取りを丁寧に
- 個の理解について 交流の先生には、原籍校に還元していくことを期待

【テーマ3】教職員にとって安心でき、働きがいがあり、自己を表現できる魅力ある職場づくりの推進について

- ・得意な分野で力を発揮できる機会があると良い
- ・「やってみよう」の合言葉が有効
 - 分かりやすさ、シンプルさ、浸透しやすさ、失敗しても大丈夫というニュアンス
- ・多忙化の一つの原因に保護者対応があげられる
 - 関係性づくりがとても重要
 - 日頃からの関わり、つながり、小さな積み重ねが大切で、それがないとクレームとして表出しがちである。

【テーマ4】教育実習に関して

- ・他専攻の実習生減少の課題については、大学との連携を
- ・教育実習以外で学校に来られる機会があると良い。
 - 介護等体験も良い機会となる。

6、次回連絡 令和8年5月12日(火)予定

7、閉会